

西洋中世学会第 17 回大会 (2025 年) ポスター報告要旨

2025 年 6 月 15 日 (日)

於 東京大学

1. 寺島 奈那 TERASHIMA Nana (早稲田大学)

キリスト教思想によるテウルギアの受容

Theurgy in Christian Thought: The Influence and the Reception

テウルギア (神働術) とは、2 世紀の『カルデア神託』に端を発する儀礼実践であり、新プラトン主義、特にイアンブリコスによって理論化された概念である。本報告は、キリスト教思想によるテウルギア概念の受容を、新プラトン主義からの哲学的影響を踏まえて整理する。特に、擬ディオニュシオス・アレオパギテースによるテウルギア概念の受容に焦点を当て、キリスト教思想における再解釈の方向を検討する。

2. 加藤 政夫 KATO Masao (学習院高等科)

高等学校の世界史における西洋中世史—その可能性と限界—

—事例⑭ 通史学習の意義—

European Medieval History in High School History Education: The Relevance of Learning Comprehensive

History

近年の歴史教育において、あまり評判のよくない「通史学習」の意義を再検討する。発表者は本務校において、「歴史総合」と「通史でない世界史」という 2 種類の授業を受け持っているが、これらの授業を行うなかで、「通史」を学ぶことの意義を再認識することが度々ある。高等学校の世界史において「西洋中世史」を学ぶことの意義を考えるひとつの材料として、高等学校の世界史において「通史」を学ぶことの意義を再評価してみたい。

3. 井上 智也 INOUE Tomoya (岐阜県立高校)

**“市民性教育”と西洋中世学の接続に向けて
—新課程歴史科目の実践からの展望—**

Toward the Connection between “Citizenship Education” and Western Medieval Studies: Perspectives from the Practice of a New History Course

本報告では、高校新課程歴史科目の趣旨を踏まえた単元構成と授業案の一部を示し、そこに自らの研究実践や『西洋中世文化事典』（2024年）などの学界の成果がどのようにかわり得るのか、現時点での構想・展望を提示する。関連して、大学や地域の博物館等との連携について、地方公立高校教員の立場からの意見を述べる。以上を踏まえ、狭義のアカデミア・教育カリキュラムに閉じない「西洋中世文化」探究のあり方について、多方面からの議論を喚起することを目指す。

4. 立花 香里 TACHIBANA Kaori (同志社大学)

**『カンタベリー物語』におけるゴシック建築解釈
—「賄い方の話」における窓のイメージを中心に—**

Interpretation of Gothic Architecture in *The Canterbury Tales*: An Analysis of Images of the Window in *The Manciple's Tale*

14世紀イギリス詩人ジェフリー・チョーサーによる『カンタベリー物語』には、ゴシック建築様式に見られる窓や柱などの特徴が美德や悪徳の象徴と共に道徳的教訓や処世訓を暗示するイメージとして取り入れられている。本発表では、『カンタベリー物語』の中の「賄い方の話」を取り上げ、その典拠作品や影響関係が指摘される教化文学における窓のイメージと対照させながら、登場人物たちの関係を通して読み取ることが出来る口や目にまつわる教訓を考察したい。

5. 伊藤 光 ITOH Hikaru (東京都立大学)

ザルツブルク大司教ピルグリム二世 (在位 1365~1396) による 教会領委任統治について

Delegation of Ecclesiastical Principalities under Archbishop Pilgrim II of Salzburg

これまでの聖界諸侯領研究では、所領の獲得や購入と比べて、他の聖界諸侯からの所領の委任統治についてはあまり注目されてこなかった。本発表はザルツブルク大司教ピルグリム二世が1370年にパッサウ司教から司教領を7年間、1389年にベルヒテスガーデン修道院から修道院領を6年間、統治を委ねられた事例に注目し両事例の証書2通を比較検討する。この検討を通じて、大司教の政治における委任統治の位置づけを考察したい。

6. 井上 果歩 INOUE Kaho (東京学芸大学)

13世紀ヨーロッパにおける記譜の変遷 -装飾性と幾何学性の観点から-

Musical Notation in Thirteenth-Century Europe: Its Illumination and Geometricity

13世紀のヨーロッパ(特に西欧)では、新たな音符が次々と考案され、種々の記譜法が併存した。多くの先行研究がその背景として、この当時複雑化したポリフォニー音楽のリズムを書き残す必要があったことを指摘している。一方で、13世紀において記譜は単に音楽の記録手段であったというよりは、視覚的な芸術として受容され、さらには数学的・学問的価値を見出されていたことも見逃してはならない。ゆえに本ポスター発表では、13世紀のヨーロッパの記譜の多様化と変遷を、楽譜写本や音楽理論書を通じ、その装飾性や幾何学性から紐解いていくことを目的とする。

7. 塚本 和 TSUKAMOTO Kazu (東京都立大学)

カタルーニャ・ロマネスク建築の交差部ヴォールトの形状に関する研究

A Study on the Form of Crossing Vaults in Catalan Romanesque Architecture

イベリア半島のキリスト教建築では非常に早い段階からシンボリオ(交差部塔)を設ける構成が見られ、特にカタルーニャ地方のロマネスク建築にいくつかの事例が存在する。本研究は、文献資料に基づき、従来あまり注目されてこなかったカタルーニャ・ロマネスク建築における交差部ヴォールトの形状に着目し、複数の事例の比較・分析を通してその特徴を明らかにする。

8. 福田 孝英 FUKUDA Takahide (京都大学)

**9 世紀ビザンティン余白詩篇において鏡像関係がみられる挿絵
- 「ダニエルの夢解き」と「聖エウスタティオスの幻視」をめぐって-**

Mirrored Illustrations in Ninth-Century Byzantine Marginal Psalters: “Daniel Interpreting the Dream” and “The Vision of St. Eustathios”

《クルドフ詩篇》(モスクワ国立歴史博物館 cod. gr. 129d)、《パントクラトール詩篇》(アトス、パントクラトール修道院 cod. 61)、《パリの 20 番詩篇》(パリ国立図書館 cod. gr. 20) の 3 つの写本は、9 世紀に制作された最初期の挿絵入りビザンティン詩篇であり、イコノクラスムとの関連においても重要な作例として知られる。本報告では、複数の写本に共通して描かれている 2 つの主題に着目し、図像の分析と比較を通して 3 写本の制作順を再検討するとともに、余白詩篇の制作プロセスについて考察する。

9. 岡 翔太 OKA Shota (東京都立大学)

**中世ドイツ都市におけるユダヤ人とキリスト教徒の共生
- 「共同市民制」論再考-**

Coexistence of Jews and Christians in Medieval German Cities: Reconsidering the ‘Concivilitas’ Theory

中世ドイツ都市では 13 世紀後半以降、一部のユダヤ人に市民権が与えられた。ユダヤ人史家であったハーファーカンプは、市民権に基づくユダヤ人とキリスト教徒の複雑な関係を説明するため「共同市民制」(conciuitas) という語を用い、ユダヤ人とキリスト教徒の共生を主張した。本研究では、ハーファーカンプの提唱する「共同市民制」論の限界を従来とは異なる方法で指摘し、形式的な市民権ではなく実践行為からユダヤ人の市民的立場を検討する。

10. 池田 真弓 IKEDA Mayumi (慶應義塾大学)

1460 年出版 (?) 『カトリコン』の装飾イニシャル比較分析の試み

The *Catholicon* of 1460(?): A Preliminary Report on the Comparison of Its Decorative Initials

ヨーロッパにおける活版印刷術の導入者ヨハン・グーテンベルクの関与が指摘されている出版物『カトリコン』は、奥付に「1460年」と出版年が印刷されているものの、1460年から1472年頃の間3度にわたって印刷されたという説や、すべて1470年頃、3台の印刷機を用いて印刷されたとする説が存在するなど、謎の多い作品である。発表者は、美術史の手法を用いて『カトリコン』の謎の解明の一助とすべく、現存コピーの装飾イニシャルを比較分析し、装飾時期や印刷業者の推定を進めている。発表では本研究の中間報告を行う。

11. 坂田 奈々絵 SAKATA Nanae (清泉女子大学)

中世における献堂式の言葉と構造

–グイレルムス・ドゥランドゥス編纂の『司教典礼書』を中心に–

The Rite of Church Dedication in Guillaume Durand's *Pontifical*: Language, Structure, and Meaning

本発表では、13世紀のマンド司教グイレルムス・ドゥランドゥス編纂の『司教典礼書』に収録された教会建築を巡る諸儀式のうち、特に司教によって執行される献堂式を研究対象とする。先行する献堂式次第を参照し、その特色を明らかにしつつ、同献堂式の構造、祈願文の内容や聖歌の機能を分析する。それを踏まえて、献堂式において示される、教会建築に関する神学的理念を考察する。

12. 嶋崎 礼 SHIMAZAKI Aya (九州大学)

17世紀のゴシック様式

–オルレアン大聖堂のトリフォリウムの建設技術–

Gothic Style in 17th Century: Construction of the Triforium in the Orleans Cathedral

宗教戦争のさなか、1568年に大部分が破壊されたオルレアン大聖堂は、17世紀初頭から19世紀にいたるまで、200年以上の期間をかけて再建された。古典主義的な趣味の強かった時代にあつて、破壊前のゴシック様式をほぼ忠実に再現したデザインは注目に値する。一方、その建設技術が中世のものとのどのように異なるのか・異ならないのかに関する考察はなされていない。本発表では最近の実地調査をふまえ、オルレアン大聖堂のトリフォリウム（内部立面の中間を走るアーケード）の建設技術について報告する。

13. 紺谷 由紀 KONTANI Yuki (大阪公立大学)

**中期ビザンツ帝国における修道士と去勢者
-修道院規則集『テュピコン』の分析をもとに-**

Eunuchs in the Middle Byzantine Monasteries: An Analysis of the Typika

ビザンツ帝国の修道院において、去勢者の扱いは複雑であった。いくつかの修道院は去勢者や思春期前の少年が修道士として所属することを拒絶する一方で、去勢された修道士しか所属してはならないと定める修道院も例外的に存在した。これらの去勢された修道士の受容と排除双方の実態を明らかにするべく、本報告は、私有修道院の設立者らによって起草された10-12世紀の修道院規則集『テュピコン』における去勢者関連の規定を分析する。

14. 関沢 和泉 SEKIZAWA Izumi (東日本国際大学)

中世の辞書・事典における編著者の「著者性」を探る

Authorship and the Role of Compiler-Editors in Medieval Dictionaries

中世の辞書・事典は先行する時代の書物や辞書・事典からの引用により、編纂時の言語の状況を反映していない側面があることが知られる。他方で先行する辞書・事典からの取捨選択や、『カトリコン』に典型的な同時代の著者からの引用（出典は明示されない）には編著者の意図とでもいべきものが垣間見られる。本発表では、こうした中世辞書・事典の状況を共有し、そこに編著者の著者性を探れるかを議論したい。